

道徳読み物資料「ぐみの木と小鳥」の各社版の比較[†]

木名瀬 明*・小森 喜代美**・濱田 真由美***
 藤井 さおり****・松本 朋子*****・上原 秀一*****
 小山市立萱橋小学校*・宇都宮市立陽南小学校**・宇都宮市立豊郷南小学校***
 宇都宮市立今泉小学校****・那須塩原市立西小学校*****・宇都宮大学教育学部*****

概要 道徳読み物資料「ぐみの木と小鳥」は、小学校低学年における「思いやり・親切」の学習に広く用いられている。思いやり・親切が自己犠牲の形をとる場面を描いた資料である。昭和57年に文部省が作成・公表した後、現在、出版社4社の道徳副読本に掲載されている。各社版においては、文部省版原典から独自の書き換えがなされており、その書き換えが、授業の展開に影響を与える可能性がある。文部省版と各社版のすべてを用いて授業を行った結果を分析する。

キーワード：道徳の時間、道徳読み物資料、思いやり、親切、「ぐみの木と小鳥」

はじめに

本稿は、小学校低学年の道徳の時間における読み物資料「ぐみの木と小鳥」について、文部省版原典と各社版の比較を行うものである。各版の異同を確認した後、それぞれを用いた授業の結果から特徴となる点を抽出し、書き換えが授業に与える影響を明らかにする。それによって、「思いやり・親切」という価値と「自己犠牲」という価値とが、小学校低学年の児童においてどのようにイメージされるのかを明らかにする。

1. 低学年における内容項目「思いやり・親切」

学習指導要領では、第1学年及び第2学年における内容項目2-(2)は次のように記されている。「2

[†] Akira KINASE*, Kiyomi KOMORI**, Mayumi HAMADA***, Saori FUJII****, Tomoko MATSUMOTO***** and Shuichi UEHARA*****: On the reading for Moral Education "Gumi no ki to kotori (Silverberry and little bird)" .

Keywords :Moral Education Classes, Readings for Moral Education, Kindness

* Kayabashi Elementary School, Oyama

** Yonan Elementary School, Utsunomiya

*** Toyosato Minami Elementary School, Utsunomiya

**** Imaizumi Elementary School, Utsunomiya

***** Nishi Elementary School, Nasushiobara

***** Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先:suehara@cc.utsunomiya-u.ac.jp 上原秀一)

主として他の人とのかわりに関すること (2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。」である。

本稿で扱う資料「ぐみの木と小鳥」は、次のような物語である。「ぐみの木」の友達である「りす」が顔を見せなくなった。心配になったぐみの木がぐみの実を食べに来た「小鳥」の様子を見てきてくれるように頼む。小鳥がぐみの実を持っていくと、りすは病気で寝ていた。次の日も行く約束をするが、その日は嵐だった。嵐の中を小鳥はりすにぐみの実を届ける。嵐の中でもりすのためにぐみの実を届けた小鳥の優しさ、嵐の中に飛び立つ小鳥を思うぐみの木やりすの気持ちを考える。さらに、りすを心配するぐみの木や小鳥の気持ち、病気の自分を気遣ってぐみの実を届けてくれるぐみの木や小鳥への感謝の気持ちなどお互いに相手を思いやり、親切にする気持ちを考えさせる内容である。授業では、嵐の申りすの元へ飛び立つ小鳥の気持ちを考えさせる時に、相手を思いながらも親切にする時の判断を問う展開が考えられる。

2. 「ぐみの木と小鳥」の原典と各社版

(1) 原典

本資料「ぐみの木と小鳥」は文部省『小学校道徳の指導資料とその利用5』(昭和57年3月)と各出版社(光文書院・文溪堂・学校図書・光村図書)の副読本に掲載されている。それぞれの版で記述に重要

な違いがある。原文と各出版社の資料による授業をそれぞれの展開例をもとに実践し、その資料と授業展開を考察する。

「ぐみの木と小鳥」の原文を、一部省略して引用する（原文は縦書き）。

（前略）

ある日のこと、一わの小鳥がやって来て、ぐみの木にとまっていました。

「ぐみの木さん、ほくおなかがすいてこまっています。」

「それはお気のどくに。わたしのみでよかったですら、どうぞおあがりください。」

小鳥は、木のえだになっっているみをくちばしでついばんで、おいしそうに食べました。

ぐみの木は、その小鳥のようすを見ているうちに、友だちのりすのことを思い出して、心ばいそうな顔をしました。

「どうかしましたか、ぐみの木さん。」

（中略）

「じつは、あの山かげに、わたしの友だちのりすさんがすんでいるのですが、このごろ少しもすがたを見せないのです。」

「そうでしたか。それでは、ほくがりすさんのようすを見に行つて来てあげましょう。」

「小鳥さん、ありがとう。ついでに、このぐみのみもとどけていただけないでしょうか。」

小鳥は、ぐみのみをいくつかくちばしにくわえると、とび立ちました。

小鳥が山かげに来てみると、りすは、びょう気でねていました。小鳥は、りすのまくらもとに、赤いぐみのみをおいて、いました。

「これは、あなたとなかよしのぐみの木さんにたのまれて、もつて来ました。ぐみの木さんは、あなたのことを心ばいしていましたよ。」

「小鳥さん、ありがとう。ぐみの木さんによろしくね。」

りすは、ぐみのみを食べてみました。すると、何ともいえないよいあじが、口の中にひろがっていき、少し力が出てきたように思

われました。

つぎの日も、小鳥は、ぐみのみをくわえて、りすのところへとんで行きました。

「からだのぐあいは、どうですか。」

りすは、なみだを目にいっぱいうかべて、いいました。

「おかげで、だいぶよくなりました。」

しばらくして、小鳥は、

「りすさん、では、またあしたね。」

というと、とび立って行きました。

つぎの日、小鳥は、あらしの音で目をさしました。ぐみの木は、いいました。

「小鳥さん、きょうは、あらしですよ。だから、りすさんのところへ行くのは、あらしがやんでからにしてくださいね。」

小鳥は、しばらくまちました。しかし、いつまでまっても、あらしはやみそうもありません。小鳥は、あらしの音を聞きながら、じっと考えていましたが、やがて、ぐみのみをいくつもくわえると、とび立って行きました。ぐみの木は、

「小鳥さあん、気をつけて。」

とさげびました。小鳥のすがたは、だんだん小さくなっていきます。はげしい雨と風が小鳥のはねにあたって、今にも地めんにたたきつけられそうです。しかし、小鳥は力をふりしぼってとびつづけました。やっとの思いでりすのところにたどりつくつと、りすは、

「こんなあらしの中を、よく来ていただきました。小鳥さん、ありがとう。もうすぐ、ぐみの木さんにあえるでしょう。」

といいました。そのばん、小鳥は、りすの家にとまりました。

朝になると、あらしもやんで、空が青くすんでいました。小鳥は、ぐみの木のところへいそぎました。ぐみの木は、話を聞くと、「りすさん、もうだいじょうぶでしょう。ごしんせつは、いつまでもわすれません。」といいました。やがて、小鳥は、ぐみの木にわかれをつけて、とびさりました。

（村田吉之視 作）

(2) 各社版

①資料に登場する「ぐみの木」「小鳥」「りす」の三者の関係について

ぐみの木にやってきた小鳥はおなかですいていて困っているところをぐみの実を食べさせてもらうことで助けてもらう。ぐみの木とりすはなかよしの友だち関係である。小鳥は心配しているぐみの木のためにぐみの実をりすに届ける。りすはぐみの木と小鳥に感謝し、ぐみの木も小鳥に感謝する。

上記の4社のうち、文溪堂以外の3社は、原文と同じ、三者の関係が読み取れる。文溪堂はぐみの木とりすの友達関係については明記されていない。しかし、ぐみの木の話からりすは、いつもぐみの木を訪れていることは分かる。また、文溪堂は、小鳥が「おなかですいていて困っている」という描写はない。

②嵐の中の小鳥について

原文と大きく記述が違っていたのは、文溪堂と学校図書である。原文は、小鳥は「嵐の音を聞きながらじっと考えていました。」と書かれているところを文溪堂は、「しばらく待ちました。」に書き換えている。また、文溪堂は、小鳥が「はげしい雨と風がはねにあたって今にも地面にたたきつけられそう」な中、「力をふりしぼって飛び続けた」を、「あらしはすこしおさまってきました。」に改作しているところが特徴的だ。学校図書は、小鳥が嵐の前に飛び立つことをじっと考えたり、待っていたりする記述が無く、嵐がなかなかおさまらないところを「いつてきます。」と飛び立っていく。

③物語の最後の場面について

嵐の中、小鳥は、りすの家にたどり着き、感謝されるとともにりすの家に一晩泊まり、つぎの日ぐみの木に別れを告げて飛び立つ、という原文の物語を文溪堂はりすに感謝されるが、りすの家に泊まるかどうかは書かれていない。光文書院はりすの家にたどり着くところまで物語を完結させず、窓から嵐の中を飛んでくる小鳥を心配そうに見ているところで終わっている。

3. 独自の展開例による授業

(1) 授業の記録

各社版を用いた授業の分析に基づき、筆者らは光文書院の資料を使った独自の授業計画を立てた。その記録を抜粋する（平成26年2月17日宇都宮市立豊郷南小学校2年授業者松本朋子）。

Tさて、嵐が出てきました。嵐の中をぐみの実を届けたんだけど、届ける前に小鳥さんはじーっと考えてたんだけど、どんなことを考えてたと思いますか？ちょっとお隣さんと話してみてもいいかな。

Tじーっとどんなことを考えてたと思う？

C羽が破れないか心配。

Cりすさんにぐみの実を届けられるかなあ。

Cぐみの実が途中で落ちないかなあ。

Cりすさん病気でかわいそうだな。

C飛ばされるかな。

C自分がけがしちゃうかもしれないけど、りすさんはぐみの実を待ち遠しくしてるだろうな。

Cりすさん今頃何をしてるかな。

Tじーっと考えていたのは、自分のこともあるし、りすさんのこともあるし、いろいろ考えてたんだね。その他考えたことあるかな？

Cぐみの木さん大丈夫かな。

T何で？

C嵐だから。

Tそんなことを考えてた小鳥さん、悩みました。自分も大変。りすさんも心配。ぐみの木さんも倒れちゃうかも。でも、どうしたんだっけ？

Cりすにぐみの実を届けた。

Tぐみの実を届けようと飛び立ったんだよね？もう一回飛び立ったところを読みます。（範読）

T地面にたたきつけられるって、どうなっちゃうの？

C土と雨と一緒にドーンと落ちちゃうこと。

Tしかし、小鳥は力を振り絞って飛び続けました。この小鳥をみんなはどう思う？

C優しい鳥。

C勇敢で優しい鳥。

C強い鳥。

C頑張ってると思う。

C勇気がある。

T勇気で勇敢ですごいんだけど、わーっってなっちゃったらさ、（小鳥のペーパーサートを動かす。）すごいと思う？

Cううん。

Tこうなっちゃったらどうする？勇気で勇敢ですごくて優しいけど、こんななっちゃったらどうする？すごいこと？すごいと思う？

Cううん。

T すごいよね。だってさ、地面にたたきつけられちゃったらいやだね。勇気で勇敢ですごく優しいけど、自分がこうなっちゃたら・・・

C かわいそう。

C 落ちちゃう。

C 痛い。

T 飛び立っていった嵐っていうけどさ、どのぐらいの嵐だったのかな？

C どしゃぶり。バーバーずっと降ってて風が強い。

T でも、こうには・・・

C ならない。

T きっとすごい嵐で、頑張ってる嵐で、頑張りな嵐なんだけど、わーってならないぐらいの嵐だったんだよね。

T 頑張ってる様子を窓から見てました。頑張ってる様子を見てたりすさん、どんな気持ちで見てたと思いますか？

C 無事に自分の家に着くかな。

C そんなに心配しなくていいのに。

C 大丈夫かな。ほくのためにそこまでしなくていいのに。

C 自分のことを心配してよ。

C 見てられないよ。

T 一生懸命小鳥さんはりすさんのところに行ってます。小鳥さんはりすさんを思っています。りすさんはりすさんで一生懸命飛んでいる小鳥さんを見えています。こういうふうにはりすさんも小鳥さんのこと、小鳥さんもりすさんのことを思っている。しかも、ぐみの木さん大丈夫かなって思っているようなこういうこと。みんなの中で、お互いを思いながら、お友達とか身近な人に思い合いながら、親切にしたりされたりしたことありますか？

(2) 考察

授業計画の立案に際して、親切という行動について考えた。例えば、見知らぬ人が困っていた場面で、親切にするという行為についてである。見知らぬ人であるから親切にするには、勇気がいる。その時さらに親切をするにあたり自分が時間的、物理的に問題があったとき、相手に対して親切にする事と自分の事を秤に掛ける。多くの問題が生じない場合だったら、自分の事は我慢できる（我慢できるぐらいの事という条件のもと）。しかしながら、自分の人生が掛かっていたり（仕事や受験など）自分の

命が掛かっていたりすると果たしてそれは、親切と言えるのだろうか疑問である。指導要領解説に記載されている「蛮勇」に当たるのではないかと。

そこで、この資料の小鳥が「はげしい雨と風がはねにあたって今にも地面にたたきつけられそう」な中、「力をふりしぼって飛び続けた」ことに注目し、親切な行為をする小鳥の「嵐」に対するイメージを児童に考えさせた。文章では、自らの危険を顧みず飛び立つ小鳥の無謀ともとれる様子が書かれているが、どれぐらいの「嵐」の強さだから小鳥は飛び立つことができたのかを考えさせた。

この授業で光文書院の資料を選んだ理由は、物語の最後の場面である。光文書院の資料はりすの家にたどり着くところまで物語を完結させず、窓から嵐の中を飛んでくる小鳥を心配そうに見ているところで終わっている。この描写から、小鳥が激しい嵐の中にも関わらず、りすの家に向かってくる事に対して、りすの視点から考えられることが分かった。そのことで、小鳥の危険を冒してまでの親切をどう思うかが考えられる。また、りすが小鳥を思いやっていることが分かるので、展開後段の振り返りへの移行がスムーズであると考えた。

親切な行為をする小鳥の「嵐」に対するイメージを検証するに当たり、小鳥が飛んでいる様子をペープサートで表現した。「はげしい雨と風がはねにあたって今にも地面にたたきつけられそう」な中、「力をふりしぼって飛び続け」る小鳥を児童は「かっこいい」「勇敢だ」「親切だ」と賞賛していたが、授業者が小鳥のペープサートを力尽きて倒れそうに表現すると表情が変わった。さらに「小鳥さんはこんなふうになってしまっても勇敢だといえるだろうか。」と発問したとき、児童は首をふり「そうではない」と表現した。以上から考えると、親切な行為をする小鳥の「嵐」に対するイメージは、「小鳥自身が怪我をしない程度の努力をすることですりすの家にたどり着けるぐらいの嵐」であることが分かった。児童の中の親切に対する思いの中には「自己犠牲」や「蛮勇」になってしまうほどの困難（嵐）はありえないということが判明した。

参考文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説道徳編』東洋館出版社、2008年
- 2) 文部省『小学校道徳の指導資料とその利用5』1982年

(2015年 3月31日 受理)